

4X-1

入出力関数を基礎とした形式的並行プロセス記述体系とその表示的意味論

堀田英一

NTT電気通信研究所

1. まえがき

並行システムの仕様記述・検証を目的として種々の形式的体系或は数学的モデルが提案されている。この内R.Milnerが提案したCCS¹⁾は、外部から観測可能なインタラクションの時間的順序関係を記述するものであり、システムの必要十分な規定を可能とする点から評価が高い。一方通常の手続き型言語を基礎とし並行動作記述機能を付加した言語(Ada, ISOのEstelle等)による記述とCCSによる記述の対応関係(例えばEstelleによる記述がCCSによって記述された仕様を満たすか否かの判定法等)は必ずしも明らかではない。

本稿ではシステム仕様の記述・検証のための形式的理論として手続き型言語の主要な機能を含み、かつ仕様に対して観測可能なインタラクションの時間順序を導出可能とするような理論TCS(A Formal Theory of Communicating Systems)を提案する。既に提案された同種の他の体系²⁾と比較して、TCSは再帰的定義が可能である等の点で強力であり、上記の対応付けをある程度可能とする理論となっている。TCSのアウトプットについては、treeを用いてそのモデルを与えることにより示す。

2. TCSの言語及び公理

TCSの言語及び公理系はCCSと対応する部分が多いが、次に述べるTrStt型を持つことにより本質的に逐次型³⁾の μ ラム言語を含む理論になっている点異なる。

TCSは複数の対象型と各対象型に対する等号を持つ述語論理における形式的理論として定義される。対象型はVar, Val, Stt, VExp, Bool, BExp, TrStt, Lab, Exc, Prg, TrPrgの11種類である。各解釈的には変数の領域、変数の値の領域、初期状態の領域=(Var \rightarrow Val), 式の領域=(Stt \rightarrow Val), 真偽値の領域、 μ -ラム式の領域=(Stt \rightarrow Bool), 状態変換の領域=(Stt \rightarrow Stt), 入出力 μ -ラムの領域、初期状態が与えられた場合の μ -ラムの実行結果の領域、 μ -ラムの領域 \equiv (Stt \rightarrow Exc), μ -ラム変換の領域=(Prg \rightarrow Prg)を表す。また各型の変数としてx, v, s, e, d, b, f, k, c, p, tを用いる。

2.1 言語要素

TCSの言語要素の主なものは以下のものである。但し:の右辺は各記号の型を示す。

1)定数記号: X1, X2, ..., Var, L1, L2, ..., Lab, TT, FF: Bool.

stop: Exc.

2)関数記号: (,); TrStt \rightarrow TrPrg. <, >; Lab*Var \rightarrow TrPrg.

[,]; Lab*VExp \rightarrow TrPrg. sum, par: Exc² \rightarrow Exc. sum', par': Prg² \rightarrow Prg. cond: BExp*Prpg² \rightarrow Prpg. ist: Exc \rightarrow Stt. sbs: Stt*Var*kval \rightarrow Stt. apl1: Stt*Var \rightarrow Val. (注)(f); <k, x>; [k, e]; は各CCSの τ の前置, positive labelによる binding, negative labelによるqualificationに対応する。

3)述語記号: $\rightarrow, \rightarrow, \rightarrow$: Exc*Exc. $\rightarrow, \rightarrow, \rightarrow$: Exc*Lab*Val*Exc. (注) $\rightarrow, \rightarrow, \rightarrow$ は各CCSの

$\tau \rightarrow \alpha v \rightarrow \alpha v$ に対応する。 \rightarrow は外部の作用によって状態が変化することを表す。

2.2 TCSの公理系

以下TCSの公理系の主要なものを挙げる。

(注) $\rightarrow, \rightarrow, \rightarrow$ という表現を含む論理式はその部分 $\rightarrow, \rightarrow, \rightarrow$ で置き換えてえられる3つの論

理式を表すものとする。また ist(c), sum(c1, c2), par(c1, c2)を各lcl, c1+c2, c1lc2と略記する。

1) 対象型の関係から要請される公理

ある対象型を他のものの間の関数空間と解釈したとき成り立つ論理式の一部を公理とする。例えばapl1は関数としての外延性を満たす。即ち $\forall x[apl1(s, x)=apl1(s', x)] \Rightarrow s=s'$ 。以下apl1(s, x)をs(x)と略記する。

2) 外延性 $\forall k, v, c, s[(p1(s) \rightarrow c \Leftrightarrow p2(s) \rightarrow c) \wedge (p1(s) \rightarrow c \Leftrightarrow p2(s) \rightarrow c) \wedge (p1(s) \rightarrow [k, v] \rightarrow c \Leftrightarrow p2(s) \rightarrow [k, v] \rightarrow c)] \Rightarrow p1 = p2$ 。

3) 置換 sbs(s, x, v)(x)=v $\wedge (x \neq y) \Rightarrow sbs(s, x, v)(y)=s(y)$ 。

4) (,); ((f); p)(s) $\rightarrow c \Leftrightarrow c = p(f(s))$ 。

5) <, >; (<k1, x>; p)(s) $\rightarrow c \Leftrightarrow k = k1 \wedge c = p(sbs(s, x, v))$ 。

6) [,]; ([k1, c]; p)(s) $\rightarrow c \Leftrightarrow k = k1 \wedge \exists x[c = p(sbs(s, x, v))]$ 。

7) sum(,) c1+c2 $\rightarrow c \Leftrightarrow c1 \rightarrow c \vee c2 \rightarrow c$ 。

8) par(,) c1lc2 $\rightarrow c \Leftrightarrow (\exists c1', c2'[c1 \rightarrow c1' \wedge c2 \rightarrow c2' \wedge lcl' = lcl' \wedge c3 = c1'lc2'] \vee \{左式の1, 2を置換した式\}) \vee \exists k, v, c1', c2'[(c1 \rightarrow c1' \wedge c2 \rightarrow c2' \wedge lcl' = lcl' \wedge c3 = c1'lc2'] \vee \{左式の1, 2を置換した式\})$ 。

9) cond(, ,) (b(s) = TT \Rightarrow cond(b, p1, p2)(s) $\rightarrow c \Leftrightarrow p1(s) \rightarrow c \wedge (b(s) = FF \Rightarrow cond(b, p1, p2)(s) \rightarrow c \Leftrightarrow p2(s) \rightarrow c)$)。

10) Guarded Termに対する再帰的定義可能性(schema)

Prg型termで自由変数としては p_1, \dots, p_n 以外を含まず、各 p_i が(f); $\rightarrow, \rightarrow, \rightarrow, [k, e]; \rightarrow$ の部分に含まれているものをN次guarded termと言う。各N次guarded term G_1, \dots, G_n に対して、" $\exists p_1, \dots, p_n, \forall p'_1, \dots, p'_n[\bigwedge_{1 \leq i \leq n} [G_i \{p'_i/p_1, \dots, p'_i/p_n\}] \Leftrightarrow p'_i = p_i \wedge \bigwedge_{1 \leq i \leq n} p'_i = p_i]$ "を公理とする。但し[N] は1からNまでの数の集合、 $G\{b/a\}$ はG中のaをbに置き換えたものとする。この公理により定義可能性が保証されるPrg型定数記号の定義を、TCSにおける仕様記述という。

2.3. TCSにおける結果

関数記号:= を次のように定義する。

(x:=e)(s) = sbs(s, x, e(s)).

TCSにおいてもCCSと同型の展開定理が導かれるが、特にTCSの特徴を端的に示す次の命題が得られる。

【命題1.】

$([k, e]; p1)l(<k, x>; p2) = ((x:=e); (p1lp2)) + [k, e]; (p1l(<k, x>; p2)) + <k, x>; (([k, e]; p1)lp2)$.

3. TCSのモデル

TCSのモデルをシステムの初期状態集合から可能なインタラクション系列を表現する無限tree集合への関数空間を用いて与える。

3.1. 各対象型に対する対象領域の解釈

各対象型Exc, Prg, TrPrg, Var, Val, Stt, VExp, Bool, BExp, TrStt, Labの解釈領域を対象型の名前に'を付加して表す。解釈領域のうち基本的なのは、Exc', Var', Val', Lab, Bool'の5つであり、他はこれらから2.で述べたように関数

